

経営情報の学問的探究

An Academic Quest for Management Information

石 川 弘 道

1. はじめに

本日ここに、高崎経済大学経済学会主催による退職記念講演を開催していただきましたことに対し、関係各位に対し心から感謝申し上げます。また、多数の学生と教職員の皆様にお集まりいただきましたことに対し、心から御礼申し上げます。

ところで、12月に次期学長候補となることが決定し、これからも4年間は大学に残ることになりましたが、教員としては今年度退職ということは変わりがなく、これから退職記念講演を始めさせていただきます。

2. 経営情報を考える

経営情報について考えるとき、経営情報学部や経営情報学科を手掛かりとすることができます。この部分の詳細については、本号掲載の拙稿「“経営情報”に関する一考察」を参照していただくとし、本抄録では、まず講演で用いた表のタイトルを記載します。

- ・経営情報学部経営情報学科を開設している大学
- ・経営情報学部経営情報学科が開設されていない大学
- ・経営情報学部以外の学部経営情報（科）学科を開設している大学
- ・経営情報学部を開設後、改称または改組した大学
- ・経営情報学部・学科の英語表記

経営情報学部・学科の英語表記から、“経営情報”＝“経営”and“情報”としている学部・学科が多いことがわかります。しかし、その実態は“経営情報学”＝“経営学”or“情報学”であり、“経営情報学”＝“経営学”∪“情報学”となっています。

本来、目指すべきは“経営情報学”＝“経営学”∩“情報学”でなければなりません。すなわち、

“経営情報学”＝“情報を基礎とした経営学”and“経営のための情報学”であり、

“経営情報”＝“情報を基礎とした経営”and“経営のための情報”

“経営情報”＝“information-based Management”and“Information for management”と考えるべきであります。

よって、一般的な経営学や情報学を平面の経営学や情報学とするならば、“情報を基礎とした経営学”と“経営のための情報学”は、いずれもが「経営活動の場における情報の共有と活用」を焦点とする凹面（例えば、パラボラアンテナのような放物面）の経営学であり情報学でなければならぬと考えます。

3. 経営情報の共有と活用

そこで、焦点となる「経営活動の場における情報の共有と活用」を考察します。経営の場において、人間と情報が出合い、そこで情報が活用される時、その空間こそが経営情報システムであると考えています。そのとき、人間の背後には使命があり、情報の背後には事柄があります。また、情報活用のためには情報共有が前提となります。このような認識に立って、情報共有と情報活用を考えることとします。

3.1 情報共有を考える

一般に、人や組織の間での情報の流れにとって、時間・空間・人数・組織・心理・費用は制約要因であり、流れを阻害することがあります。そこで、情報の流れを促進するためにデータ・情報・知識の生産・流通・蓄積が行われます。これはコミュニケーションシステムの手段的側面であり、そして今日、情報技術、特にストック技術であるデータベースとフロー技術である情報ネットワークによる情報化の促進により、手段的側面は大きく変革しています。しかし、人や組織の間で同一の情報が存在しているからと言って、必ずしも情報が共有されたということにはなりません。前提条件としてのメタ情報の共有が重要です。そして、情報共有こそがコミュニケーションシステムの目的的側面なのです。メタ情報と情報共有の関係を落語『菟菟問答』や『道灌』に学ぶことができます。

3.2 情報活用を考える

経営情報システムのサブシステムをTPS、MSS、SISとする考え方があります。そこで、情報活用空間を情報システム空間と捉える立場から、経営情報システム探究の柱の一つである情報活用による経営戦略について考えることにします。

サプライヤー、当該企業、カスタマー間で情報が共有されていることを前提として、情報活用を協奏曲（concerto）的情報活用と狂想曲（capriccio）的情報活用の二つに整理します。前者は、計画的で統制され、調和のとれた全体最適を志向します。後者は、即応的で自由に、ひらめきによる個性重視を志向します。

情報共有し、情報活用による協創戦略を展開し、経営革新を行う場合、対象の違いからプロダクト・イノベーションとプロセス・イノベーションに大別できますが、前者においては狂想曲の情報活用となることが多く、後者においては協奏曲の情報活用となることが多いと考えます。

4. 人間を考える

情報技術がいかに発展しても、情報活用の中には人間が存在しなければならないと考えます。そこで、大量にエネルギーを消費するようになった現代人と恒温動物・哺乳類としての人間を比較し、現代人が動物としてのリアル人間からバーチャルな人間に変身していることを指摘します。体重60Kgのリアル人間の標準代謝量88.75wに対し、日本人一人あたりの平均エネルギー消費量の半分2200wを標準代謝量とするバーチャル人間の体重は4311.9Kgとなります。

体重から、哺乳類の行動範囲を計算すると、リアル人間の行動半径は1.94Kmであるのに対し、バーチャル人間の行動半径は18.69Kmとなり、徒歩30分と自動車30分が対応します。

哺乳類の脳重量の計算式によれば、体重60Kgでは0.247Kgであり、体重4311.9Kgでは6.364Kgとなり、脳の重量は25.8倍となります。現代人の実際の脳重量は1.3Kgであり、既に5.3倍のバーチャル化です。現代人の消費エネルギーから考えると、0.247Kgと6.364Kgの比較から、バーチャル人間としての現代人の脳は、3.88%のリアルな脳と96.12%のバーチャルな脳から構成されていると考えてよいでしょう。

以上、経営情報の学問的探究と題して述べてきましたが、経営情報の楽問的探究と題した方が適切であったかもしれません。

5. 本年度退職の先生に贈る

同じ時期に退職を迎える予定であったことから、同僚である5人の先生方の退職記念号に一文を掲載することを辞退させていただきました。代わりに、この機会をお借りして各先生方のお名前を織り込んだ短歌を贈らせていただきます。

北條 勇作 教授	豊穣の 夢は叶いて 堆く 才学の山 悔いは残らず
茂木 一之 教授	持ち合わす 技量の多さ 数知れず 豊かな見識 究めし学理
三瓶 憲彦 教授	見つめたり カフカの作を 目を凝らし 乗り越え行かば ひこばえ育つ
吉田 俊幸 教授	良き実り 代掻きするが 第一歩 斗酒を生みたる 雪国の米
塩田 咲子 教授	知りたるを 教えることの 楽しさや 咲きたる姿 個々に描きて

6. おわりに

本日は誠にありがとうございました。羊頭狗肉の講演であったことをお許しいただきたいと存じます。

平成25年1月30日 於図書館ホール

参考文献

拙著『経営情報の共有と活用』中央経済社、2001年。

拙著『落語と情報学』青蛙房、2001年。

本川達雄『ゾウの時間とネズミの時間』中央公論社、1992年。

